

## 第7章 労働と遊び・近代化していく女性の場合

### ——与謝野晶子の事例を中心に

今井 泰子

#### 1. 庶民階級女性の育成条件一般について

本題から少し脇道にそれるが、最初に処理しておかなければならない大事な問題がある。というのは、近世社会で抑圧されていたのは武士階級の女性であって、農・工・商の庶民階級女性は自由だった、近代の教育や法制によって武士の倫理が日本中に持ち込まれたために日本女性全員の地位が低落したのだ、という歴史理解が、学界や評論界に広く流布しているが、それをここで皆様に先ず捨てていただかなければならない。それなしには、私の主題である与謝野晶子の労働観や遊び観の意味を正確には見通せないからである。

一般論を語るよりも、庶民女性の現実がこの通説と如何に背離していたか、事実を示すほうが早道であるだろう。その最大の例証が実は晶子だ、とさえ言えるのである。

晶子は、1878年（明治11年）に、堺市の、駿河屋という近世以来の暖簾を誇る菓子屋の三女に生れた。あの有名な「君死にたまふことなかれ」は、そういう「旧家をほこるあるじ」になるために、「末に生れ」て親の愛を一身に受けて育った「あきびと」の弟が、今なぜ、天皇の名で「人を殺して死」ぬことを強要されるのか、そんなことは「あきびとのお家のおきてに」は無いと憤る詩である。つまり、晶子は、上層ではあれ庶民階級の出身であり、武士階級の出ではないことを強く意識していた人であった。

また、有名な子福者（出産は12人、養育は8人）であると同時に、膨大な作品を残した巨人でもあった。晶子の執筆量は全く驚くべきもので、現在の最良の全集であり、ここでも底本に使う20巻本全集（講談社）さえ、まだ全作品の半ばも収めていなかろう、と噂されるほどである。にもかかわらず、幼少期を語る文章は極端に少ないという興味深い事実がある。しかも、数少ないその記述の多く、ほとんどとさえ言える多くには、いつも抑えられた悲しみが顔を覗かせている。ことによると、思い出して書くのも憂鬱になるような娘時代だったのかも知れないとも推測される。例えばこうである。

自分は学校へ行く以外に家の<sup>しきる</sup>閨を<sup>また</sup>跨いだことは物心を覚えて以来良人の許へ来るまでの間に幾回しかない<sup>と</sup>云ふことの数へられる程稀であつた。（略）勿論学校へ行くには女中や雇人の男衆が送り迎へをする。其外の場合は父や親戚の老人や雇人の婆やなどが伴れて行つてくれる。全く単独に出歩いたことは無かつた。

女学校を出てからは益々家の中でばかり働いて居た。厳し過ぎる父母は屋根の上の火の見台へ出ることも許さなかつた。父母は娘が男の目に触れると男から墮落させに来るものだと信じ切つて居た。甚だしい事には自分の寢室に毎夜両親が嚴重な錠を下して置くのであつた。

（「私の貞操感」14巻、ペ376）

あるいは、こうも書いている。

私は<sup>はたち</sup>二十歳過ぎまで旧い家庭の陰鬱と窮屈を極めた空気の中でいぢけながら育つた。私は昼の間は店頭と奥とを一人で掛け持つて家事を見て居た。夜間の僅かな時間を<sup>ぬす</sup>偷んで父母の目を避けながら私の読んだ書物は、いろんな空想の世界のあることを教へて私を慰め且つ励ましてくれた。（略）私は専ら自由な個人となることを願ふやうになつた。そして不思議な偶然の機会から<sup>ほとん</sup>殆ど命掛けの勇氣を出して恋愛の自由を勝ち得たと同時に、久しく私の個性を監禁して居た旧式な家庭の檻からも脱することが出来た。また同時に私は奇蹟のやうに私の言葉で私の思想を歌ふことが出来た。私は一挙して恋愛と倫理と芸術との三重の自由を得た。

（「鏡心燈語」14巻、ペ438）

「命掛けの勇氣を出して」とは、東京の寛の許に走つた家出を指している。今の四十歳前後から下の方にはまるで分からなくなっているようだが、日本の伝統社会においては恋愛は完全なタブーであり、晶子のいうとおり女の「墮落」とみなされていたから、それを貫くには家出しか方法がなかつたのである。その後の晶子は、そのために勘当されて父や兄とは生涯絶縁したのであり、その家出には「命掛けの勇氣」が真に必要であつたのだ。

晶子の両親は、あるいは晶子の言うとおり厳し過ぎたのかもしれない。しかし、その方針が、「家庭」と呼べる水準の資産や家族を持つ庶民階級が娘を育てる時の、ごく一般的な方針であつたことはおそらく間違いない。というのは、晶子に1年遅れて日本橋の間屋街に生れた長谷川時雨も、晶子と大差ない厳格な育てられ方をしているからである。<sup>(1)</sup>時雨の家庭の養育方針は『旧聞日本橋』特にその補筆版「渡り切らぬ橋」に端的に語られている。それと読み比べるなら、この町屋の娘二人には共通するしつけが幾点も発見される。第一に、親や祖母の命令には一言の異論をはさむ余地もなく絶対に服従しなければならなかつた。第二に、単独の外出は全く許されず、子供仲間との路上の遊びなど論外であつた。第三に、読書も禁じられ、本は親の目を盗んで読むしかなかつた。第四に、家の中の種々の労働が厳しく課されて、身軽に働くことが習慣づけられていた。「渡り切らぬ橋」によれば、こういう禁忌を破ると、時雨は蔵に縛りつけられたり、灸を据えられたり、楊弓で叩かれた。時雨の場合には文字との接触の禁止がとりわけ嚴重で、書き貯めた物を親に焼かれたことさえあつた。

「母は、なんでそんなに厳しくしたかといえ、出来もしないことにふけて、なま半可なものになるのを、ばかに怖れたのではないかと思う」、というのが、時雨の解釈であつた。これはおそらく的を得た観測で、晶子もやはり書いている。「わたしは夜なべの終るのを待つて夜なかの十二時に消える電燈の下で<sup>ふたおや</sup>両親に隠れながら僅かに一時間か三十分の明りを頼りに清少

納言や紫式部の筆の跡を<sup>ぬす</sup>偷み読みして育ったのである。両親の私を見るのは『只の女』に育って行けばよいのであった。兄に授けた高等教育の片端をも授けようとする家庭では無かった。」（「清少納言の事ども」14巻、ペ61）

2人の親が娘の将来に想定していた人生は、母親たち自身がそうであったように、親の決めた縁談を従順に受入れて結婚し、その後は余計なことに心奪われずに身を粉にして働く女になることであったろう。晶子の母親は、子供たちと「十分と<sup>おちつ</sup>沈着いて」「向ひ合つて居る」（単行本『私の生ひ立ち』ペ11）間もないほど忙しい人だったというし、時雨の母親も「終日クリクリと、実によく忠実に」（「渡り切らぬ橋」）働きまくる人だったという。江戸の仏師に嫁入った高村光太郎の母にしても、大分県の酒屋に嫁いだ野上弥生子の母にしても、その生涯は、みな勤労と奉仕に明け暮れる一生である。例えば、光太郎がその母を評して書いている。「朝は早くから夜はおそくまで働き、食物は家中で一番悪いものをたべ、（略）すべての苦しみに耐へて、本当の無心で、唯自分を一家のものにしてしまつて、何も考へずに死んでしまつたのであるから……全く不思議な生活もあつたものだと思つてゐる」（「母のこと」）。

そういう一生を過ごすには、女がそもそも家の中にいなければならなかった。

家にいるという、この「只の女」の前提条件を、近世育ちのこの階層の女は、みなよく守ったようである。1886年（明治19年）生れの谷崎潤一郎が、「昔は女が外へ出なかつたので、私の母親なんといふものはちよつとも道を知らなかつた。（略）私のうちが蠣殻町だつたけれども、歌舞伎座へ行く道も知らなかつた」（「幼年の記憶」）と書いているし、信州上層農民出身の島崎藤村も、小説『家』のお種に次のように語らせている。お種のモデルは、1874年（明治7年）に葉問屋に嫁入りした藤村の姉である。

私も、橋本へ来てから斯の歳に成るまで、町へ出たことが無いと言つて可い位…<sup>ほんとう</sup>真実に家<sup>うち</sup>の内<sup>なか</sup>にばかり引込みきりなんですよ…（略）買物には小僧も居れば、<sup>をんな</sup>下婢も居る。嘉助始め皆なで外の用を好く<sup>た</sup>達して呉れる。ですから、私は家を出ないものとして居ますよ……女といふものは、お前さん、斯うしたものですからね。

日本には「男は外、女は内」という成句が昔からある。これは、今では、男が職業を担い女が家庭を担う、という近代家族の労働分担を示す言葉だと解されているが、そうではない。元来これは、潤一郎や藤村が記したとおりに女の居場所を指定する成句であり、儒教の五経の一つである『礼記』（「内則」）の中の「男子居外、女子居内」の句に発している。それが享保頃から後述する幕府の教育政策によって和文の文脈にも現れ始め、幕末には典故を思い出す者もないほど日本中に普及して指示が守られるようになった、というに過ぎない。この機会に岩波文庫『ワグマン日本素描集』119ページの絵も参照願いたいものである。商家の並ぶ本通りの群衆の中に女が一人もいないそのスケッチ（場面は1861年）を御覧になれば、日本には庶民まで含めて『礼記』の「内則」を受容した過去が確実にあった、という私の説明を、どなたも納得されるはずである。かつ、その解説をお読みになるなら、女のいない理由が、今やその道の専門家にさえ分からなくなっていることにも気づかれるはずである。「私は母が表の

通りを歩いているのを見たことがないんですよ」と、野上弥生子が座談の中（全集別館2、ペ420）で語るような風景が、幕末の本通りの実景だったのだが。

つまり、東アジアの一国である日本は、この儒教大古典の記述に従って女性を公的世界から除外し、男性から隔離し、家庭における男性の付属物と位置づけたのだった。また同じ『礼記』（「内則」）の別の条の規定によって、女性を男性より天性劣る生物とも考えて、女性に学問は不要だと判断した。晶子も、時雨も、こうして、外出を禁じられ、読書を余計な行為と片付けられ、家の労働を厳格に仕込まれたのである。

例の庶民女性自由説が最初に提示されたのは50年代。提示者は井上清であり（萌芽的な発言は戦前からあった）、ただちにそれに従ったのが諸沢容子である。そして私の記憶では、この説が広がり出すのは60年代後半からである。しかし、それは上記のごとき過去をすでに忘れた者たちが立てた希望的歴史解釈に過ぎない。近世庶民生活からの転換に直接接した者が事態をそんなふうに眺めていなかったことは、潤一郎、藤村、光太郎の発言にも見られるとおりである。やはり庶民に生れて近世研究の大御所になった三田村鳶魚にも次の発言がある。「女房を虐待するのが男前のいいことのようにも思われていました。（略）概していえば四民ともに妻を卑しむ傾向があった」（「女の世の中」）。

そこで、戦前の人々は、開明的であれば男女を問わず、日本の近代化を、教育であれ法制であれ、そういう抑圧からの女性の解放の過程と解して歓迎した。晶子は特に大歓迎した一人であった。「若しお互が明治初年の女に生れて居たなら、どんな精神生活をしたか、どんな物質的生活をしたかと考へると、現代の若い女の仕合な事を誰も感謝せずには居られないでせう。従来の女は思想、感情、意志、何れにしても大変な繫縛を受けて居ましたが、今日の娘達は兎にも角にも其固陋な繫縛を半分以上解かれて居ります」（「婦人の青春時代」14巻、ペ32）。明治末年の発言である。

念のために書き添えれば、「男なみ」に屋外労働に従事した下層庶民女性でも、その地位は何も高くなかった。本来「内」にいるべき女が、家の所得が低いために仮に「外」にいるに過ぎないのだから、その仮の労働が、女性の「本性」である劣位を解消するいわれはないのである。現に、明治32年生まれ男性が書いた『村の暮らし——ある小作農の手記』という本が、明治の下層農民層の男女関係を次のように描き残している。<sup>(2)</sup>

たとえわが子でも、女は男より先に風呂に入ることはなかった。食膳の最上席が主人で、長男・次男とつづき女は末席だった。御飯もおかずも男の茶碗についてから最後が女だった。家によっては男が食べ終わらないと女は食べなかった。魚の頭や胴を男に与え、女は尻っぱだったが、それもないときの方が多かったが、女の宿命として不平はなかった。それでも御飯を食べさせてくれるだけでも幸せと思っていた。

夫婦同伴で肩を並べての姿は見たことがなかった。三步下がって夫の影を踏むのが若嫁だった。

男の子には財力の限り進学させたが、女の子には「勉強の必要はない、下女か子守りに出せばよい」だった。学校に行きたがると「女のくせに、いらんこと」だった。



もっとも、こういう食事風景は日本人の広範な風習としてすでに晶子が記していることだから（『日本婦人の退廃的体質』15巻、ペ248）、『村の暮らし』の叙述は何も新しい指摘ではない。庶民としては相当に豊かだったはずの晶子の生家すら家族が同じ食事を取ることはなくて、父親の料理だけが「三度が三度料理屋から運ば」（『雑記帳』14巻、ペ225）れて、他の家族はそのお裾分けにあずかったという。そういう愚かな習慣は捨てなければいけない、それには先ず銘々膳を止めて、家族全員が同じ時間に同じ部屋の一つテーブルで同じ食事を取るように、食生活が改善されなくてはならない、というのが晶子の主張であった。

また、『村の暮らし』の文章中の教育に関する指摘も本当は今さらのものである。男女就学比の伸びの極端な開きは、教育統計資料によって明治の最初から明らかにされていたし、その開きが下層庶民の意識の反映に他ならないことも、文部省が苦言しつつづけていた。かつ、男子に対する女子の就学比は、女性の地位の算定に際して今も国際的に使用される重要な基準である。つまり、日本の近世下層庶民女性の地位の低さは昔から明々白々で、井上が不勉強すぎたのである。<sup>(3)</sup>

ついでに書けば、そういう未就学の女兒層が、近世以来のあの膨大な売春婦層を形成する層でもあった。彼女たちは、路上の遊びも男児との接触も禁じられはしなかっただろうが、それは、親が貧く多忙過ぎて子供を仕付ける余裕や習慣を持たなただけのことである。売春世界に売られていく未就学女性の性習慣は、「人権意識未確立な未開発社会の問題」とは呼びえても、「自由」とは呼べないはずである。少なくとも現代世界の常識では。

## 2. その出身に由来する晶子の労働観

### —— 武士階級の娘、平塚らいてう・山川菊栄らとの比較において

今や誰の目にも見えることだが、現代アジアのどの国であろうと、開明化は上流階級から始まり、やがて大衆化される経過をたどっている。それを日本だけは特別に逆で、大衆に、開明化の必要のない良好な人間関係が最初からあって、その理想郷を、上流の保守性が近代以後に押し潰したのだ、などとどうして考えられようか。近世社会の女性に対する抑圧は国中を被う日本の「文化」だったから、福沢諭吉や森有礼等、武士階級出の近代化の先導者が、女性解放の先導者も兼ねた、というのが実際の歴史であるだろう。今から見れば限界だらけの思想にしても、それが日本で先駆の思想だったことに変わりはない。その提唱を入れて、ただちに女性の状況改善に着手したのも先ずは武士階級であり、庶民階級とくに思考の世界に遠い下層の男女は、いつまでも後に残されたのである。

では、晶子の生涯はと言えば、それは、そういう暗闇からの解放を願い続けた女の闘いの歩みであった。恋愛を貫き、歌人として出発したこと自体が「命掛け」の社会的反逆であったことはすでに眺めたとおりだが、やがて書かれ出した社会評論は、日本社会に対してさらに意識的に発せられた女の戦闘宣言であった。

晶子が評論に手を広げた理由は、第一評論集（1911年＝明治44年刊）の序に晶子自身が書いている。「新聞や雑誌の依頼を受けてその時時に筆を取」る必要が生じてきたからであった。

平塚らいてうの『煤煙』事件（1908年＝明治41年）前後から世間の女性問題に対する関心が急速に高まって、新聞雑誌類が、筆の立つ女のまだ極端に少なかった時代ゆえに、すでに有名な詩歌人であった晶子に対して何かと見解を求め出したからである。やがて1915年（大正4年）1月から、『太陽』が『婦人界評論』の常設欄を晶子に提供した。その背後には、1911年（明治44年）9月の『青踏』創刊による、女性問題に対する関心の一層の高まりがあったし、渡欧による思想の成長という晶子個人の条件の整備もあった。こうして晶子は、生涯で15冊の評論集をまとめていった。

しかし、そういう経過で始まった評論活動であるために、そこには自ずと限界も生まれた。第一には、数多い子供の養育や従来から続く文学活動の合間をぬって書かれた、という多忙さのために、第二には、当人自身もいう通り、「兄に授けた高等教育の片端をも授け」て貰えなかったという学問的訓練不足のために、晶子の評論の論調は、その時々話題を論評するジャーナリスティックで断片的な傾向を帯び続けたし、その論理や用語も、この大正デモクラシー時代の男性思想家から懸命に学びながら編まれたものであった。

したがって、晶子の評論は決して読みやすいものではない。しかし、表現や話題の細部にはこだわらずに論旨を捉える、という鳥瞰的な読み方でそれを読み続けるなら、やがて、当時のどの女性より先見性に富んだ巨大な女性思想家が姿を現してくる、というのが晶子評論の魅力である。中でも、この本題である女性の労働問題に対する晶子の見解は、特筆に値する見事なものであった。

というのは、晶子は、平塚らいてう、山川菊栄、山田わかという、この時代晶子以外では残る僅かの女性論客の中の三人の女性と、家事・育児労働も含めた女性の労働問題で激しい論争を展開している。「母性保護論争」の名で知られる、この、1915年（大正4年）から5年間続いた論争は、家事労働の中でも最大のものである出産育児の意義と、女も参加する社会的生産労働の意義とを、どう関連づけて、女性の将来をどう見通すかという論争だったが、私の見るところ、この論戦の中で、今日でも通用する観点を完全に獲得しているのは晶子ただ一人なのである。<sup>(4)</sup>

枝葉を取り払った晶子の見解は明解である。出産・育児期であろうと、女性も職業労働を担って経済的独立の保証を得続けなければ、女性は男性への依存を断ち切れず、これまでの低い地位からの脱却は果たせない、と晶子は力説した。経済的独立による個々人の人格の独立が女性解放の大前提だというのが、晶子の基本思想であった。そして、家庭の中での母性役割を女の本領とみなす人々を批判した。自分は沢山の子供の母親であるし、もちろん子供を愛しているが、母性は自分の人生の一部に過ぎないし、母性役割とは元来そういうものだと晶子は説いた。子供の養育責任は両親が共に負うべきもので、子供に保護者が必要な幼児期には、両親のいずれか一方が家にいればよいだけだと彼女は考えた。今日の先進国の先進女性と差のない考えであった。さらに晶子は、折しも姿を現し始めた近代中産階級の、主婦予備軍とも言える娘たちが、服装や挙動に性的媚態を見せている新たな時代風潮に、伝統的「娼婦型」女性の寄生性と同質の精神の腐敗を感じ取って露骨に嫌悪した。男性にすがって生きるという女性よりも、社会の下層で生産労働・職業労働につく女性の方がはるかに価値ある人生を生きている、と晶

子は言いきった。

公正を期すために一言お断わりしておこう。女性の経済的独立の必要、という晶子の考えは晶子の独創ではない。満洲事変から今次の世界大戦までを含むその後の日本社会の思想動向が、そういう時代の存在を忘却の淵に沈めてしまったが、それは、安部磯雄、金子筑水、高野重三、高橋善一、鎌田榮吉……といった、当時のリベラルな男性思想家や実業家に広く見られた思想であり、夫の寛も同じ意見であった。例えば、社会学者の鶴見和子は、父の祐輔から「結婚しろ」とは言われず「仕事をする女性になれ」と言われて育ったという。その生年は1918年（大正7年）なのである。<sup>(5)</sup> 折しも、この見解を中国では梁啓超など中国近代化の唱導者がより本格的に展開していた<sup>(6)</sup>し、欧米でも少数の先鋭な女性解放論者が理論化を進めていて、それらを受けた思潮であった。この時代までの日本の先進男性の女性観は、まだ国際的な視野を持って十分に開明的だったのである。

それに比べるなら、女性の他の論客三人の方が伝統観念の尾を引いてか、はるかに保守的であった。三人は、出産育児期も含めて女に職業従事＝経済的独立が絶対に必要だ、という晶子の基本思想にそもそも反対であって、晶子をいわば袋叩きにしたのだった。

山田わか（1879＝明治12年生れ）は、女性の独立を提唱すること自体が誤った信念だと断言した。山田によれば、育児期の妻が生活費を夫に要求するのは妻の「権利」であった。一方のらいてう（1886＝明治19年生れ）は、自分の経験に照らして母性と職業とは両立しない、と主張した。しかし、男性への従属は排されねばならないから、国家が全ての母親に経済給付を行えば、家庭と職業の矛盾も解決されて母性も保護されるし、女性の独立も確保されるだろうという、かなり虫のよい見通しを立てた。いま一人の山川菊栄（1890＝明治23年生れ）は典型的な社会主義者だったから、社会の「経済関係その物の改変」なしには女性問題の解決はありえないと考えた。女性運動は労働運動に合流すべきものだというのが、菊栄の描く見取り図であった。そして、女性の職業教育や経済的独立が近年声高に語られているのは、社会が資本主義体制に女性を組み込みたいからだと眺め、女子の職業状況の過酷さも顧みて、「私は、与謝野氏程には婦人の経済的独立の絶対的価値を認めて居ない」と述べた。菊栄によれば、晶子は18世紀のメアリ・ウルストンクラフト流の女権論にとどまっている、というのだった。<sup>(8)</sup>

このように、一見の論点は三者三様だったが、晶子を非論理的で情緒的だと解する点で三人は完全に一致していた。菊栄の論述に特に目立つことだが、三女性の論駁に顕著なのは、晶子にない学識の開陳である。そこから聞こえてくるのは、欧米の女性運動や日本社会の現実についてろくに知らない詩人なんぞはお黙りなさい、そして詩歌の世界におもどりなさい、という言葉外の声である。三人が晶子の主張を、「特殊な才能」（山田）ないし別格の「天分と精力」（平塚・山川）を恵まれた者にしか通用しない見解だと、用語も通わせて評しているのを見ると、どうやら三人は、晶子をば、天与の才能に座して個人的ガンバリ主義を説くいけすかない女だと眺めていたらしい。そこで、三人は持つ限りの知識を動員して、そういう文学者の「感情的」（らいてう）な発言を封じにかかったのだ、と観測されるのである。

「女は内」と信じられていた時代から半世紀たつやたたずのこの時期に、晶子のような見解が日本女性の共感を呼ばなかったのは仕方ないことかも知れない。しかし、その後もこの論争

に対する日本の女たちの理解は、およそ、らいてうや菊栄の視点から出ずにきた。<sup>(9)</sup> 晶子の職業観の抜きん出た先見性を評価する者は、今なおいないに近い。

私は評価の完全な逆転が必要だと考えている者だが、ここは「母性保護論争」自体を論ずる場ではない。ここで押さえるべきことは、なぜ、晶子一人が同時代の思潮に棹さしてそういう鋭い女子労働観を持ちえたか、という一点である。その答えも晶子は書いてくれている。

両女史（＝平塚・山田）が母体の経済的独立が不可能だとされるのは、何か両女史御自身の上に、及び両女史の境遇に、それを不可能にする欠陥がありはしませんか。農民や漁民階級の労働婦人が立派に妻及び母の経済的労働を実証して居る事実を両女史は何と見られるのでせうか。甚だ露骨な事を云ふやうですが、両女史は経済的労働を必要とする家庭にお育ちにならず、従つてさう云ふ労働の習慣をお持ちにならないのでは無いのですか。

（「婦人改造の基礎的考察」17巻、ペ214）

晶子は、菊栄に対しても、菊栄が育った経済環境は自分と比較にならないほど恵まれているという指摘を、別の論述で行なっている。

そのように言われた当人たちは、これを、それこそ詩人の「感情的」発言と聞き流したに違いないが、しかし、この一節は私的な域を越えた問題を論ずる条だと私には読める。晶子は、伝統社会の階級差が女性の成育条件の差を生んだ事実に着目するよう求めているのだし、その往時の環境差が、明治・大正期の近代化の過程においても女性の労働意識を規定しているはずだという、普遍的社会現象を掘り起こしていると読める。この一節の直前に、「私は労働階級の家に生れて、初等教育を受けつつあつた年頃から、家業を助けてあらゆる労働に服したために『人間は働くべきものだ』と云ふことが、私に於ては早くから確定の真理になつて居ました」と書いているからである。「労働階級」という、時代思潮に無理に合わせたような不用意な用語に目を奪われ過ぎてはならない。

私たちは、先に眺めた庶民階級女性の生き方をここで思い起す必要がある。特に身を粉にして働く母親たちから厳しく仕込まれて、庶民階級の娘が勤労習慣を身に染み付かせていた事実を思い出さねばならない。長谷川時雨によれば「人は働くものだ、働くことは美しいという観念をたいそう植えつけられて」（「渡り切らぬ橋」）彼女たちは育った。貴女たちはそういう鍛練を経験してこなかったから、母性に職業労働は不可能だの不要だのと言い出すのだらうと、晶子は、彼女たちの思想の限界およびその所以を説いている、と私には読めるのである。勤労が不必要だったのは、むろん武士の娘である。

実は、山田の成育歴は晶子が想像したようなものではなかったが、山田の経歴は特殊過ぎるし、山田の文章は夫の嘉吉が書いたとも言われているから山田は除外して考えた方がよい。<sup>(10)</sup> そして、残る論争者の中で庶民階級生まれは晶子一人、らいてうも菊栄も、確かに武士の娘であった。しかも、二人の父親は共に、明治初期に国費で洋航したほどの社会的地位にいた人であり、そうした経済力や家庭の特別な開明性ゆえに、二人は、開設されたばかりの当時の女子教育の最高学府である、日本女子大と津田塾にそれぞれ進学できた。

ちなみに言えば、一つテーブルを家庭で囲む食事を、晶子は明治の末に晶子の見識でその家  
に実現させたが、その程度のことなら、らいてうは洋航帰りの父親の提唱で幼時以来日常習慣  
にしていた。らいてうはピアノやヴァイオリンを弾き、家族とトランプを楽しみながら育った  
娘である。また、水戸藩の儒家に生れた菊栄の母親は、最初期の近代女子教育の最高のものを、  
晶子が生れる前、1872年（明治5年）のその開始と同時に受けた人である。英語を学び、椅  
子テーブルやベットの寮で肉食を取り……という母親千世の追憶は、日本近代女性の黎明期の  
記憶として非常に有名である。菊栄はそういう母親の養育下で、姉や兄と、近代小説も、新聞  
雑誌類も、漢詩文も、日本古典も、自由に読みふけり、議論し、外を飛び回って成長した。<sup>(11)</sup>こ  
ういう環境を先の晶子や時雨のそれと比較していただきたいものである。

とは言え、そうした恵まれた育ちの娘には、それゆえにかえって、晶子が指摘するとおりの  
弱点が運命づけられていたとも言える。というのは、武士階級とは、確実な、ただし物価の上  
昇に伴わない俸禄が何世紀も保証されてきた階級だったからである。そこで、武士階級は金銭  
にこだわらぬことをよしとしてきたし、女性を社会的生産労働には決して関与させずにきた。  
子供時代のらいてうは金銭を話題にすることさえ許されなかったと記すし、私の母の生家が薩  
摩藩の家老の家だった体験に照らしても、それが武士の家庭の仕付けの原則である。二人の娘  
がその後「女の経済的独立」の必要性をどれほど知識として学ぼうと、その欲求や気迫が晶  
子と比較にならないほど弱かったのは、無理もないことだろう。そして一方の晶子は、ま  
ず母が負い、次に姉が負い、姉が嫁いだあと引き継いで負った駿河屋の帳簿責任を預かって、  
経済こそ人生の基礎だという感覚を骨の髄まで染ませて育った人であった。そんな晶子の目  
には、二人の発言が「お嬢さまの寝言」以上のものに写るはずがないのである。

実際には、もちろん、晶子は二人の武士の娘の成育環境を知らないわけだが、娘に対する武  
士階級の養育方針が町屋のそれと異なることは、明治の末に、森鷗外の妹の小金井喜美子が娘  
時代を小説に描いていて、それで承知していた。のみならず、「今日の開けたと云ふ家庭でも  
許されぬほどの知識と趣味」（『新婦人の自覚』14巻、ペ22）が娘に授けられていたことを心  
深く羨んだ。二人の実情を知ったなら晶子の頭には血がのぼったかも知れない。

晶子は特別な才能に基づく仕事を誇負するために立論したわけではなかった。逆に、自分こ  
そ広範な日本女性の現実の側にいるという確信あればこそ、孤立を恐れず執拗に持論を述べ続  
けたのだ、というのが私の理解の結論である。武士の人口比率は、青森県や静岡県が一对二十  
～三十（一が武士）、鹿児島県や佐賀県が一对三～五というような相当の地域差があって平均  
は俄かに示し難いが、ふつう言われる全国平均は6%程度である。

ただし、誤解はしないでいただきたい。庶民階級に生れて生産労働に従事してさえいれば、  
それだけで女性の地位向上が果たされたというわけでは決してない。晶子にしても自己の出身  
階級女性の実情ぐらい百も承知であった。その地位の低さを晶子はこう書いている。

我等婦人は久しく考へると云ふ能力を放棄してゐた。（略）手足の労働に於ては都会の婦  
人の一部を除く外、今日も猶男子を凌いで重い苦しい負担を果たしてゐる。山へ行つても、  
海岸へ行つても、市街の各工場を覗いても、最も低額の報酬を受けつつ最も苦痛の多い労働



に服してゐるのは婦人である。其れに拘らず男子より輕蔑せられ従属者を以て冷遇されてゐるのは、唯手足のみを器械的に働かして頭腦を働かせないからである。

（「婦人と思想」14巻、ぺ16）

勤労の精神に加えて、従来の女の問題に気づいてそれを拒否する批判的知性が何としても必要だというのである。それは近代思想の自覺的受容なくして得られるものではない。

そこで、晶子は、職業労働従事と並んで女性の知的向上を女性問題解決の絶対条件と考えた。具体的には、良妻賢母教育の廃棄あるいは教育の男女平等化を、また、平生からの思索や読書の努力による女性の知性育成の必要性を、強く訴え続けた。

そして、らいてうも菊栄も、それには異議は挟まなかった。教育や思索を追求する条件では、武士階級女性の方が階級として昔から数段先んじていたからである。菊栄が1902年（明治35年）に東京の公立小学校から女学校に進んだ時、同級生（女子クラス）7、80人中進学者は14、5人、商家の娘は1人もいなかったという。菊栄は自伝に書いている。「それは経済力の問題ではなくて、ものの考え方の問題でした」。確かに、経済力に問題のない時雨も、山田わかも、樋口一葉も、親のものの「考え方の問題」で学業は初等小学程度で終りにされて、諦めの涙をのんだのであり、女学校に進学できた晶子はまだしも幸運の部に属していた。

### 3. 晶子の労働観の背後にあった遊びの観念

#### ——— あるいは庶民階級の労働観と余暇観の関係について

要するに、晶子は、庶民女性の環境の悪さを逆に生かし直して、当時のどの女性より先見性豊かな、優れた労働観に到りついた人だったということになる。しかし、視点を次の遊びの問題に移すなら、その背後にたちまち見えてくるのは、およそ勤労一本槍の、まるでゆとりのない暮らしぶりである。

そもそも、晶子に遊ぶ時間が残っていたであろうか。残るわけがない。

教育すべき子供の数。相応にあったはずの夫の世話。有名人夫妻ゆえにこれまた多かった客の相手。少しも電化されていなかった家事労働。晶子はすべてを女中まかせにしていたわけではないし、裁縫も料理も非常に手早く巧みだったと、多くの人の追憶が伝えている。

加うるに、あの大量の執筆という本業があった。新聞雑誌の歌壇の選者という仕事もあり、自宅で夫と行なっていた古典購読の仕事もあった。読書も必要だった。1919年（大正8年）に書かれた「女子の読書」という評論は、当時の与謝野家に届いていた新聞が9種類、月々集まる雑誌が60種類だったと伝えている。取捨はするがと断わって、それでも一寸でも必ず目を通す雑誌は、と名を記すものが、中央公論、太陽、改造、哲学雑誌、経済論叢、法学論叢、史学雑誌……と35種にも上るのである。11時頃に他の仕事を終えて就寝するまでの2、3時間が、基本的な読書時間であり（「女子の読書」17巻、ぺ560）、子供と共に6時前後には起床した（「私の宅の子供」14巻、ぺ131）。

だからこそ、晶子は嘆いた。「自分には暇が無い。なぜ人は眠らなければならないのか、死

んでから十分に眠ればよいではないかと、睡眠時間の惜しまれる事さえある」(「雨の半日」14巻、ペ40)。また、三男の出産後まだ床についていた時には述懐した。「平生忙しく暮らして居りますので、斯う静かに臥つて居りますと何だか独りで旅へ出て呑気に温泉にでも入って居る様な気が致します」(「産屋物語」14巻、ペ3)。

一体、なぜそこまで働いたのかと言えば、最大の理由は簡単である。それだけの収入が必要だったからである。夫妻はどの子にもよい教育を施さねばならないと考える人たちであった。だが、そうではあっても、寛という人は、人との余計な摩擦で仕事の枠を狭めたり、金もないのに留学しがったり、衆議院選に出馬してみたりといふかなり厄介な人でもあった。1918年(大正7年)の彼の慶応大学教授就任までは与謝野家に安定した収入はなかったから、大所帯の経済責任はむしろ晶子の肩の側に大幅にかかっていたのである。

では、晶子の執筆は単に生計維持の義務感のみに支えられていたのかと言えば、そんなことはない。例の論争の過程で、反論者を説得すべく晶子が最も力説した点は、「能力の解放」が女にもたらす充足感であった。「人間として労働しないで居ると云ふ事は、自分の力を持て余して、生甲斐の無い、寂しい、無為無能の日送りをする」ことだと、晶子は強調した。長時間の重労働にさえ時に「苦痛の中に自己を試しつつある」という「享樂が混」じるものだ、とも主張した(「私達労働婦人の理想」17巻、ペ264～5)。

こういう主張には説得力があるであろうか。主婦人生をやめようとしている今日の女たちに對してはあるに違いない。しかしながら、その慶賀すべき晶子の満足感、また同時に、嘆息すべき別の問題に横すべりする質のものだった、ということも確かである。

自分は年に一、二度無い時間を差繰つて旅に行く。温泉などの一日一夜は縛された縄を解かれた様で心も身も伸び伸びする。併し二日三日となると田舎の生活の無為なのに倦いて、しみじみと仕事のある都会が恋しく、安閑な日送りの空虚な感じが悲しい程身を嘔むのを覚える。

(「私の文学的生活」14巻、ペ356)

習慣というのはおそろしいものである。若いころから間なしに働くように習慣づけられてきた晶子には、自由な休息など半年に一日程度もあれば十分で、それ以上は苦痛だったのである。この心理構造は、有給休暇も返上して他国民から不思議がられるような、現代日本人の「勤勉さ」と同類のものである。多くの現代日本人も同様だが、晶子は相当に重篤なワーカー・ホリックだったのだ、と私は観察する。死んでから眠ればよい？

さて、先のらいてうたち武士の娘に対する晶子の批判を振り返れば、そういう生活習慣の底には、常時の勤労を生計の唯一の保証にしてきた日本の民衆の、貧しい、長い歴史があったということになるであろうか。もちろん一面ではそう言えるだろう。

しかし……である。しかし、私たちは、前近代のアジアにおいて貧しい民衆を擁した国が日本一国ではなかったこと、にもかかわらず、日本以外のアジア諸国の民衆が、日本人のような勤勉な国民性を形成してはこなかったことにも注意する必要がある。晶子自身の認識がどうであろうと、貧しい民衆がここまで勤勉になるには、そもそも勤勉の正当性や有効性をその民衆

社会が信じていなければならない。「稼ぐに追い付く貧乏なし」と考え、「朝寝、朝酒、朝湯は身上を潰す」と自戒して、つまり、貧しい者は怠けず、遊ばず、働くものだと思いこんでいなければならない。結局は、そういう思想が日本の津々浦々に普及浸透するような対民衆政策が長年取られていて、民衆がそれによく従っていなければならない。

私は、事の出発点は、『慶安お触れ書き』を筆頭とする幕府や諸藩の庶民向け法令のたぐい、そこに貫通する勤勉節儉奨励思想、遊興抑制思想であったと睨んでいる。とくにその普及のために取られた寺小屋政策が重要な役割を果たした、と観測する。私の父の生家が、寺小屋経営の具体例として教育関係書に再々引用される北関東の旧い地主だった、という体験に基づく観測である。つまり八代將軍吉宗は、直々に、幕府が開版した1、2の和文の儒教倫理概説書と共に、上記の法令や五人組帳前書を寺小屋で教科書として教えるよう奨励し、後の寛政の改革も天保の改革も、吉宗と同一歩調を取った。大正デモクラシーの思潮を背景に書かれた石川謙の名著『日本庶民教育史』<sup>(12)</sup>が解き明かした事実である。この指摘は、寺小屋の数が全国に増えれば増えるほど、全国の民衆が、幕藩法令類の説く勤労精神の信奉者になり、相互に牽制し、監視しあう五人組み精神の持ち主になったことを意味するのである。冒頭章に引用した、『村の暮らし——ある小作農の手記』が、明治の小農の勤勉競争をよく描き残している。

農民の労働時間は永かった。農繁期の農作業は、星を仰いで田に行き、星をいただいて帰るといわれていたが、これは稲刈りと麦蒔きのことで、田圃で夜を明かし、明るくなると、どの家も働いていた。夜風に吹かれて帰ってくると、道々でまだ稲を刈ったり、麦を蒔いたりしていた。(略) 文字通り夜を日についで働きだった。これはある仕事虫のおっさんの働き話だが、月夜を幸いに稲刈りに行き、眠気を催したから夜の一時頃いったん家に帰り、草鞋をはいたまま上り框に伏し、ウツラウツラと一眠りしてまた稲刈りに毎日行っていたと。こんな話は農村にゴロゴロしていた。

例の「女は内」の観念も、この勤勉精神の浸透と同じ道筋で全国に広まったのであろう。

「儒教思想では遊びは悪事だが、日本でその点はどうなのか」と、この研究会の終り近い会で、台湾出身の阪大大学院生、蔡小瑛が質問した。私は儒教が勤勉を奨励することは知っていたが、遊びを悪事視することには気づいていなかった。言われてみれば、確かに現、5、60代日本人の親世代に当たる明治人には、遊びを悪事視するような、あるいは弁解や何かの理由づけなしには後ろめたくて遊べずにいるようなところがあった。

晶子の意識は、そういう明治人の意識と相呼応していたし、近世に近い年数分だけ遊びを排除する度合いも強かったのだ、と考えれば納得できる。晶子は、時間のなさもさりながら、当時の社会習慣にしたがって遊ぶ意志を持たなかったのだと結論づけられる。



もっとも、そういう近世庶民にも事実として遊びは幾らでもあったし、ほとんど遊ばなかった晶子でも「遊び」という語を作品から拾うことは可能である。晶子のそれがどういう文脈に

現れるかを吟味することで、庶民が「遊び」なるものをどのようにとらえ、労働との関係をどう認識していたかを解析し、私の報告の最後の問題提起にしたい。

晶子の作品でこの語の現れる領域は、先ず何より子供の世界である。この語は晶子自身の子供時代の思い出、あるいは晶子の子供たちの姿の描写の中に最も頻繁に登場する。当時の人々が、子供は遊びを好むものであり、遊ぶことこそ子供の本領だと信じていたことが理解されてくる。その意識もまた近代に始まるものではないだろう。江戸時代の児童文化の豊かさは、アン・ヘリングの優れた研究がすでに明らかにするとおりで、遊びが子供の本領だと普遍的に信じられていればこそ、ヘリングが紹介した楽しい江戸おもちゃ絵の世界も生まれたに違いない。<sup>(13)</sup> 晶子の次の例文はその考え方の典型例である。

私は満三歳<sup>みっつ</sup>になつて直ぐ学校へ遣<sup>や</sup>られました。ですから遊びの方に心を引かれることが多くて、字を習ふ方のことを情けなく思つて居ました。私と同年の竹中<sup>おないとし たけなか</sup>はんが私の家<sup>うち</sup>へ遊びに来る約束をしてくれました。その日になりますと私は嬉しさに学校へ行く気になれませんでした。(略) 私は今日は家で竹中<sup>うち</sup>はんとは遊ぶのだとばかり云つて、学校へ出ようとはしませんでした。(単行本「私の生ひ立ち」ペ13)

この研究会の最初の頃に暉峻淑子が、「戦前までの小学校の標語は《よく学び、よく遊べ》だった、あれは何故《遊べ》だったのか」と疑問を投げかけたが、その答がここでどうやら出たようである。欧米の義務教育制度に習って日本の子供全員を学ばせることに決めた明治の文部官僚は、当然ながら欧米の児童観からも学んだが、従来の児童に関する社会通念もそのまま生かして、学習と遊びとを平行させるつもりだったのだと推測されるのである。児童から遊びを奪ったのは戦後の日本人だという以外ない。

では、今日の狂気の沙汰に近い教育状況を改めるには、昔の児童観を掘り起こしてそこに戻ればよいのであろうか。ヘリングはそう考えているようだが、それは疑わしい。よく見れば、かつての児童観とその遊び観には江戸時代の遊び観という裏づけがあり、そこには今日の状況を生む因子が潜んでいる。晶子の次の例文も読んでいただきたい。

わたしはクリスマスにも正月にも其外祭日や誕生日にも、出来る丈の範囲で子供達の喜ぶことをして遊ばせて遣りますが、子供達が小鳥の様に蝶の様に(略)生生と遊んでゐるのを見ますと、自分もうつとりとして幼い時の気持ちに帰り(略)ます。そんな気持ちは直ぐ覚めるにしても、子供達の楽し相な様子を眺めてゐると、成るべく長く遊ばせて此夢を飽く迄見させて遣りたい、美しい思出を大人になつても成るべく豊かに残させて遣りたいと斯んな事を考へまして……。(「雑記帳」14巻、ペ242)

これで見れば、晶子も、この文章を読む明治人一般も、人が心おきなく遊べるのは子供時代に限られていて、その幸福な状態は早晚終る、と信じていたらしいのだ。さもなければ「成るべく長く遊ばせて此夢を飽くまで見させて遣りたい」という願いは成り立たないからである。

いずれ終る夢だからせめて長かれと親心は願う。大体、ここで「夢」と称されたこと自体が興味深い。第一に、遊びに生きる子供時代が、人間の仮の姿だと考えられていたことになる。第二に、「夢」の対語である「うつつ＝現実」を生きる大人が、人の真の姿として意識されていたことになる。大人というものは、晶子のように「現実」の生計に責任を持ち、休息もそこそこに働くものだと思われているのである。子供にその責任はない。

換言すれば、子供は「現実」に責任を持ってないし持たないからこそ遊びを公認されていたに過ぎない。往時の子供時代の特権は、原田信男が私とは別に説くであろう近世社会の分際観、分限観に基づく、「子供の分際」に対する許容であって、人間一般の条件や権利の問題ではなかったのである。戦後、社会の民主化によって分際意識が消えていくにつれて、教育の場から遊びの容認も消えて、やがて到達する大人の勤労世界、そこにおける社会的地位に寄与する有益性の追求のみがそこに残ったのだ、と私は理解する。武士の藩校にせよ、庶民の寺小屋にせよ、日本の旧時の教育機関は、元来、学習者各人の分際を前提にして、成人後の人生に実際に益することを目指す機関に他ならなかった。

さて、教育問題はともかく、以上の解析に立てば、私たちは日本の「遊び」について次のような定義を導き出せるのではあるまいか。江戸時代において、遊ぶか遊ばぬかの差を決定していたのは、現実の勤労生活に対する責任の有無であった、と。時雨の『旧聞日本橋』には子供以外に気軽に大に遊ぶ者として、女では数人の「隠居」が登場する。「隠居」とは日本の伝統社会が制度として置いた人生上の身分であり、現役労働からの退去を公認された者たちである。彼女らが遊んでいたのは当然で、その遊びも伝統社会の公認行為であったのだ。

そうだとすれば、働き盛りの大人であろうと、現実の勤労生活に責任を持つ必要がなければ、あるいは持つ意志がなければ、遊興も可能だったことになる。近世の遊び人が、経済的余裕の十分にある武士階級や上層庶民の男性に、さもなければ、それとは逆に全く社会的軌道の外にいたその日暮らしの男性、いわゆる細民や賤民に現れたのはごく自然である。経済基礎のかなり危うい庶民でも、晶子の生家のように有能な妻や娘がいれば実労働は彼女らに任せておける。公認の《社会の本筋の正道》はやはり勤労の側にある。労働と遊びの両方が、すべての人の人生に必要な要素と考えられていたわけではないのだから、現実が切迫してくれば誰しも、たちまち、遊びはおろか睡眠までを棚上げする、という思想構造なのである。

働き過ぎ問題にせよ、女性問題にせよ、教育問題にせよ、長い歴史が私たちにもたらした思考の枠組み自体を克服することなしには、問題の真の解決もありえないと私は結論づける。晶子は飛び抜けて自由に思考できた人であり、それゆえ、あの奔放華麗な作品群で今も私たちを楽しませてくれている。しかし、その晶子にしても、庶民出の明治女性や明治人一般や日本人一般が負う思想的桎梏のすべてから自由、というわけにはいかなかったのである。

## 注

- (1) 時雨の母親は正確には旗本の娘である。しかし、時雨の養育方針も含めて長谷川家の家庭で采配を振っていたのは姑であったし、母親自身も幕府崩壊後に成長していて、武家出であることがその



- 精神におよそ影を落としていない。すなわち娘時代にはその親の従事する静岡県塩田開墾作業に塩汲み娘として加わり、次いで東京の商家で女中奉公し、その勤勉を見込まれて町人階級出の弁護士、長谷川深造の後妻に迎えられた人である。
- (2) 楠本藤吉著（御茶の水書房、1977年）。著者は、福岡県に5人の姉の末の一人息子として生れた。その両親は近世生れの人である。著者も本来なら小農を継ぐ運命にあったが、小学校卒業後に村の青年学級に学んだ縁で、母校の教員欠員に際して代用教員を依頼されて教育界に入り、定年後にこの貴重な記録を残した。
  - (3) 全国平均の推移は、『学制百年史』等の文部省公刊物や教育史の類で簡単に確かめうる。さらにその原資料である『文部省年報』によって県別数値まで点検すれば、問題はより明らかになる。私の計算では、明治ひとけた期の、女子就学ワースト県は秋田県（日本統合という特殊事情によった沖縄県を除く。秋田県の就学者中の女子比率は8～9%）であるが、秋田県は元来庶民比率の極めて高い県である。
  - (4) 香内信子編『資料・母性保護論争』（ドメス出版、1984年）が、この論争関係の資料をほとんど集約して丁寧な解説も加えてくれて、最も便のよい案内書になっている。
  - (5) 1995年12月31日『読売新聞』、「生涯現役」。
  - (6) 小野和子『中国女性史——太平天国から現代まで』（平凡社選書、1978年）ペ42～43。
  - (7) 晶子との関連では、高野重三が『婦人問題早わかり』（警醒社書店、大正3年）の「付録」につけたオリヴ・シュライナー「婦人と労働」（原題、Woman and Labour. 1911年刊）の抄訳本の刊行が特に大事である。シュライナーは、70年以後の世界の女性運動高揚の中で再発見され、高く評価されるに到った女性の一人で、主婦の依存性を批判し、女性の経済力の必要性を力説した。そういう理論書を出版3年後に訳した当時の日本の思想水準、及び、その思想を即座に咀嚼し、共感し、自分の理論武装の糧にした晶子の先駆性もまた再評価されてよい。経済力を重視して女性の寄生性を否定する晶子の思想は、萌芽的にはその前からあったが、全面的な展開はこの抄訳本の出版後である。
  - (8) 菊栄の論駁の中で特に有名なのはウルストンクラフトへの同定である。しかし、この比喩は、読者の無知を利用しながら、読者に対して晶子の主張を、時代遅れの古風なものだと印象づけるがための、論理の詐術のように私には見える。経済的独立の主張がウルストンクラフトの思想の本筋では全然ないし、晶子が繰り返し名を挙げて賞賛したのは、注(7)のシュライナーなのだから、同定するならシュライナーでなければならなかったのである。そして、当時ウルストンクラフトはまだ訳されておらず、原書で読んでいたのは菊栄ただひとりであった。
  - (9) 特に、帯刀貞代『日本の婦人』（岩波新書、1957年）の影響が大きい。なおこの論考の執筆後にインドラ・リービの山川菊栄論を読む機会を得た（『批評空間』1996. II-8収載）。私はリービの主張を了解するものだが、しかし同時にリービに気づいてほしいことは、山川など過去に高い評価を得ていた存在を「リブ的フェミニズム」が拒絶する態度は、山川が晶子に取った態度でもあった事実である。山川に整然と否定された結果、晶子の女性評論は文芸評論視されて読者の視界から消えた。現にリービは、晶子を思想家としては名前すら挙げていない。実は晶子も、民権運動期の女権家を気嫌いする所から歩を始めた。こんな繰り返しは弱体な日本の女性運動に何も益しないことは断わるまでもない。
  - (10) 山田は農民（地主階級）の出であるが、女術に瞞されてアメリカに渡り、シアトルの娼館で6、7年働き、そこからの逃亡後に結婚したという（『海を渡った日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、執筆担当・尾形明子）。尾形によれば、こうして「妊めない女」になったことで、母性に対する山田の強烈な憧憬が生れたという。
  - (11) 平塚らいてう『原始、女性は太陽であった』（大月書店、1971年）。山川菊栄『女二代の記』（吉川弘文館・東洋文庫、昭和47年）。
  - (12) 原版は、刀江書院・昭和4年刊、ここでは改版、玉川大学出版部・昭和47年刊の、ペ223～228による（第二章の二「江戸幕府の寺小屋政策が寺小屋教育に及ぼした影響」）。
  - (13) 『江戸児童図書へのいざない』（くもん出版、昭和63年）。